

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

№.38

1991年7月20日

## 第38号 目 次

1. 理事会報告
  2. 第12回定期大会
  3. 学術・文化情報
  4. 近着会員業績
  5. 事務局から
- 『年報』第12号原稿募集

### 1. 理事会報告

○第50回理事会 1991年4月27日(土)

場 所：上智大学

出席者：細野、加賀美、松下(洋)、水野、  
中川(和)、大貫、中川文雄(書  
記)(委任状：加茂、国本)

- 1) 10周年記念事業について。
- 2) 次期大会について。
  - a. 財団法人東京クラブ、名古屋市、愛知県より補助を受けた経緯が細野理事長と大会準備委員長の松下理事より説明された。
  - b. 大会プログラムと運営に関し運営委員長より報告された。
- 3) 理事選出方法について。選挙管理規定検討委員会長の中川(和)理事より検討の結果が報告され、次期大会では「中間報告」として報告されることになった。
- 4) 「地域研究推進の要望書」の取扱について細野理事長より説明を受けた。
- 5) 500周年シンポジウムについて。スペイン史学会より共催の申し入れがあった旨が、恒川理事より報告され、総会で計られることになった。
- 6) 1992年大会の開催地について検討された。
- 7) 入会希望者5名の入会が承認された。
- 8) 退会希望者2名の退会が承認された。
- 9) 補充理事の選出。加賀美理事のIDBへの転出により、会則に従って高橋均会員を理事に選出した。
- 10) LASAとの関係を緊密化するため、次期大会参加者に Saavedra 氏を加えることが

承認された。

○第51回理事会 1991年6月8日(土)

場 所：南山大学

出席者：細野、松下(洋)、水野、中川(文)  
高橋(均)、国本伊代(書記)

(委任状：加賀美、中川和彦、大貫、  
恒川)

- 1) 会費滞納者の取扱について。
- 2) 10周年記念出版事業について。
- 3) 大会における総会の運営について。
- 4) 入会希望者4名の入会が承認された。
- 5) 編集委員会の運営委員小坂氏に代わる新たな委員1名を委嘱することが承認された。

### 2. 第12回定期大会

日時：1991年6月8日(土)、9日(日)

場所：南山大学・名古屋国際センター

○総 会

1) 1990年度事業報告(細野理事長)

1) 10周年記念事業

- ・IDB総会との関係で名古屋市、愛知県、東京クラブの支援を得て、12回定期大会に3人の外国人研究者を招聘。
- ・会員名簿の作成と発行。

2) 国際交流

- ・LASA日本タスクフォースの準備および滞日中のサアベドラ氏を通じてLASAとの協力関係の強化。
- ・中国ラテンアメリカ学会副会長が来日し、交流の申し出があった。
- ・「中米国際セミナー」が国連大学の協力を得て開催された。

3) 部会活動

東日本部会については水野理事から、西日本部会については松下理事からそれぞれ報告があった。

4) 理事選出方法の検討

検討委員会委員長中川和彦理事がけがのため欠席。細野理事長が中間報告を代読。

〔中間報告〕

- ・骨子 1) 現行制度と変更可能な3つの制度を比較検討。  
2) 長期的視点に立った決定が必要。  
3) 実施細則を合わせて検討すべきである。
- ・変更案 1) 現行制度。  
2) 全員による郵便投票。  
3) 総会での選挙と欠席者のみの郵便投票。  
4) 現行制度による選出に、一部理事会推薦を加える。
- ・これらの案を比較検討した結果、1)と3)が実施可能と考えられる。他学会の状況も参考にして、2案を中心に慎重に検討したい。
- ・中間報告については承認された。

ii) 1990年度決算報告・監査報告

中川文雄理事より決算報告書について説明があり、市川監事より監査報告があった。

iii) 1991年度事業計画(細野理事長)

- 1) 多数の会員の参加による学会運営、社会的役割(市民に開かれた学会)、国際交流の推進などを旨とする。10周年記念事業として、定期刊行物等のリスト作成を継続する。
- 2) 次回大会を大阪外国語大学で開催する。
- 3) 500周年記念事業を検討。
- 4) 東日本・西日本部会の活動の拡充(財政的補助の拡大を含む)
- 5) 国際交流: LASA、中国など海外の諸機関との関係強化、事業活動の拡大。
- 6) 編集委員会(松下理事): 500年にちなんだ特集を企画。積極的な投稿を期待。

iv) 1991年度予算案

中川理事より説明があり承認された。本年度の大会に名古屋市、愛知県、東京クラブから援助があったことに関連して、一般会計、特別会計に分けて報告すべきであるとの意見が出されたが、この点については記録に残し、今後検討していくことで了承された。

v) 地域研究推進のための要望書について

学術審議会の地域研究推進に関する答申で中東、ラテンアメリカが研究の遅れている地域として指摘された。中東学会、オセアニア学会では既に要望書を学会として採

択している。本学会でも文部省、学術審議会などに要望書を提出し、研究状況の改善を図りたい旨、細野理事長より説明があり、承認された。

○日本ラテンアメリカ学会創立10周年  
記念シンポジウム

昨年創立10周年を迎えた本学会は、それを記念して数々の企画を立案してきたが、そのひとつが定期大会の前日に行なわれたシンポジウムであった。この催しには海外からメキシコのレオポルド・セア氏夫妻、アルゼンチンからトルクアト・ディテラ氏、チリからフェルナンド・ファインシルバ氏を招待し、以下のプログラムに沿って実施された。

第一セッション「ラテンアメリカの工業化」

報告者 国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会工業部長 F. Fajnzylber

討論者 西南学院大学 吾郷健二

抄訳者 筑波大学 細野昭雄

第二セッション「ペロニズムの変質」

報告者 シモン・ロドリゲス財団理事長

Torcuato Di Tella

討論者 東北大学 出岡直也

抄訳者 四日市大学 田中 高

第三セッション「メキシコにおける近代性の挑戦と実証主義」

報告者 メキシコ国立自治大学 L. Zea

討論者 南山大学 松下マルタ

抄訳者 東洋英和女学院大学 三橋利光

それぞれのセッションにおける報告と主な討論内容は、報告書の形で刊行される予定である。いずれのセッションも50名を上回る参加者があり、盛況であった。(文責 松下洋)

○研究発表

(1) 第1分科会

○『精霊たちの家』の語り

新谷美紀子(神戸市外大院生)

詩人パブロ・ネルーダに大きな影響を受けたというイサベル・アジェンデが、一つ一つの言葉のもつ力を重視していることは、処女作『精霊たちの家』から最新の短編集『エバ・ルナのお話』まで随所に見られる。

『精霊たちの家』は、エステバン・トゥルエバという一人の男を軸として描かれるデル・バージェ家とトゥルエバ家の一族のファミリー・サーガである。この作品のエピロー

グまでの十四章とエピローグでは語りの構造が全く違っている。すなわち、前者は、時折り「わたし」という語り手が登場するものの三人称の語りで物語が進行し、後者は作中人物アルバが一人称で語るという形式をとっているのである。G・ジュネットの『物語のディスクール』での理論をあてはめれば、エピローグまではアルバが語り手「わたし」として潜在しながら物語をすすめる<異質物語世界の物語言説>であり、エピローグはアルバが語り手としてその姿をあらわしている<等質物語世界の物語言説>となる。

ジュネットが「著しい違犯」だとするこの変化は強引とも言えるものであり、物語世界にゆがみ、ずれを生じさせているのは否定できない。しかし、これは作者が用いざるを得なかった手法上の変化であった。

この小説で祖国を描きかかったのだと言う作者は、三人称の語りを用いることで、しかも語り手として作中人物を潜在させることで、一定の距離を置こうとした。しかし、ある意味で自分の分身であり、少なくとも同時代人で同性の主人公アルバの物語になると、もはや距離を置いては語れなくなった。そのようなことをすれば、アルバはもちろん同じ時代を生きる人たちをも裏切ることになるにちがない。すなわち、エピローグでのゆがみ、よじれこそは作者アジェンデの時代と人間を裏切るまいとする誠実さの現われであり、その強引な力業を可能にしたのは、彼女の言葉に対する信頼にほかならないのである。

#### ○小説にあらわれたカリブ海の独裁者

高山 秀幸

アレホ・カルペンティエールは『この世の王国』の序で、ラテンアメリカにおいては、現実そのものが驚異的であるため、シュールレアリストのように、わざと驚異を作り出す必要はないと述べている。アレクシス・マルケス＝ロドリゲスは、カルペンティエールの言う<現実の驚異的なもの>を祖上にのせ、ラテンアメリカの自然、人、歴史にそれはあらわれていると指摘している。

ガブリエル・ガルシア＝マルケスもまた、自然を例にとり、ラテンアメリカの現実ヨーロッパのその規模をはるかに越えるという意味のことを述べているが、彼にとって、ラテンアメリカの歴史に次々とあらわれた名

だたる独裁者たちや彼らの行状もまた驚異にほかならない。1958年、独裁者マルコス・ペレス＝ヒメーネスがベネズエラから亡命したのを機に、ガルシア＝マルケスは独裁者を中心に据えた小説の執筆に取り組むのである。

だが、ガルシア＝マルケスにとって、この小説の執筆は困難をきわめた。ラテンアメリカの独裁者たちについて書かれたものを読むたび、ガルシア＝マルケスは、彼らがあまりに現実離れた存在であることに気づき、失望に襲われた。彼が述べるところによれば、ラテンアメリカの芸術家にとって深刻な問題とは、どのように驚異を作り出すかということではなく、いかに自分たちの信じ難い現実を信じさせるかという点にある。

ガルシア＝マルケスが『族長の秋』で打ち出そうとしたのは、神話的な独裁者像だった。彼にとって、ラテンアメリカにおける神話的な存在とは独裁者にほかならなかったのである。それゆえガルシア＝マルケスは、作品の独裁者から名を払拭し、小説に時間性を超越した神話的な構造を取り込んだ。この手法を通じて、作品には永遠不変な存在、即ち、祖型的な独裁者が語られることになった。

#### ○メキシコ・インディヘニスモ小説に

おけるロサリオ・カステリャノスの位置

田中 敬一(愛知県立大)

メキシコでは、1940年代後半から60年代初頭にかけて、チアパス高地に住むマヤ系インディオをテーマにした一連の小説が現われた。批評家、J・ソマーズはこれらの作品を「チアパス物」(El ciclo de Chiapas)とよび、従来のインディヘニスモ小説とは異なる文体、表現上の技法およびインディオのとらえ方を指摘している。

ロサリオ・カステリャノス(1925-74)はこの代表的な作家の一人で、1957年に出た『バルン・カナン』では、農地改革で没落するアルグエリョ家の悲劇を七歳になる語り手の「少女」の目を通して、詩情豊かに描いている。作者は、その際、「内的独白」、「フラッシュ・バック」といった現代小説の技法を用い、登場人物の心の動きや行動原理を明らかにした。

ロサリオがインディオ問題に正面から取り組んだ最初の作品は『シウダード・レアル』(1960年)で、この短篇集では、サン・クリ

ストバルに住む非インディオ系住民、「ラディーノ」のインディオに対する差別や不正、そしてその裏返しであるインディオの不信を伝統的なりアリズムの手法を用いて鋭く描いている。

彼女の最高傑作は1962年に出た小説、『真夜中の祈り』で、この作品では征服以来、収奪と搾取に苦しめられてきたチャムラのインディオの反乱を、彼らの精神世界に踏み込んで描いている。

ロサリオ・カステリャノスは国立原住民研究所で働いた経験や、文化人類学の研究書を通して、一見、「神秘的」に見えるインディオの世界も、実は自律した世界で、その中に生きる彼らは独自の規範や世界観を持っていることに気づいていた。そこで作者は現代小説の技法を用い、インディオを彼らの持つ文化のコンテクストの中でとらえようと試みた。

## (2) 第2分科会

### ○米国領プエルト・リコ及び仏領アンティル諸島における「反独立」運動

志柿 光浩(長崎大)

プエルト・リコはアメリカ合衆国のcommonwealthあるいはestado libre asociado という名の下で一定の「自治権」を持つ海外領土であり、フランス領アンティル諸島のマルティニク及びグアドループはフランス共和国内の「本土」の県と同等の立場の海外県(departement d'outre-mer:D. O. M.)である。

これらの地域にはそれぞれ米国あるいはフランスからの独立を追求する政治運動が存在するが、何れの地域においても選挙での住民の支持の多くが「反独立」あるいは「非独立」に向けられている。また、それぞれ米国、フランスへの住民の移動が多いこともこれらの地域に共通した特徴である。

上記地域の政治状況は、これを国家を形成する途上にある政治的実体であると考えてのではなく、国家内の「地域」として捉えることによってより良く理解できる。ここでいう「地域」においては、住民は固有の歴史的領土に住む自覚を持ち、地域の自決権という「相違の権利」を主張しつつも、それを包含する国家内での機会の平等と基本的人権の尊重といった「人種・民族の違いを越えた平等」を追求するのである。(梶田孝道「現代国家

と地域問題」有賀貞他編『講座国際政治3 現代世界の分離と統合』p. 180参照)

上記の視点からこれらの社会を見た場合、それが島嶼社会であること、そして住民がいわゆる「本国」の市民権を持っていることが重要である。島嶼社会であることによって地域の範囲を地理的に確定することが容易で、階級横断的、人種横断的な一つの自己完結した実体としての地域の存在が明確になる。また米国や西欧の「北」の国家への「南」の国家・地域からの移民や難民が世界的な潮流となっている中で、「南」の地域の住民が「北」の国家の市民権を持つことの意味は大きい。

### ○都市インフォーマル・セクターと農村との関係—コロンビアのコーヒー生産地帯の事例から—

幡谷 則子(アジア経済研究所)

ラテンアメリカにおける、都市インフォーマル・セクター研究は、都市における非農業雇用だけに分析視点を置いてきた傾向がある。むしろ、農村から流出した過剰労働力が、都市の雇用吸収力の不足のために、フォーマル・セクターに参入できず、都市での生存手段として雑業部門に堆積してゆく、というのが都市インフォーマル・セクター形成過程の一般的な解釈であり、この意味において、農村・都市間関係が考慮されていた。しかしながら、移動後の都市在住労働者と農村との関係については、高い関心が払われてこなかった。

本報告は、上記の分析視角に対する批判的立場から、コーヒー生産地帯という特定の地域経済下での、労働市場を媒介とする、都市・農村間関係に焦点を置くものである。分析は主として、コロンビアの主要コーヒー生産地帯のひとつであるカルダス県の県都、マニサーレス市およびチンチナ市の下層住民区における世帯調査結果に基づく。特に、コーヒー収穫作業員または、常雇に近い農業労働者として農村部に出稼ぎをする、都市在住の下層労働者の事例に注目する。その背景として、農村側の要因：コーヒー生産部門の技術革新とその雇用関係に与えた影響、及び都市側の要因：学歴格差によるフォーマル・セクターへの参入障壁などを検討する。さらに世帯内就業構造を検討し、都市インフォーマル・セクターと農業雇用との関係のもつ意味を抽出する。以上から提示される論点は次のとおり

である。

1) 都市インフォーマル・セクター労働者は農村労働市場に対する労働予備軍ともなり得る。2) 都市下層世帯内の農業雇用は、都市雑業に対する代替的・補完的な選択肢である。3) 両部門間の就業選択には、世代別、都市居住年数別の差異が認められ、労働者の都市生活体系への統合過程が反映されている。

### (3) 第3分科会

#### ○インディオ内植民地主義とチョロの台頭

吉田 栄人(静岡大)

農地改革と都市の急速な発展の中で大量のインディオが都市部へ移住した。彼らは都市に完全に同化した訳ではなく、依然インディオの生活様式を堅持している。また彼らの多くは都市における不安定な生活を経済的にも、また心理的にも補完する必要から出身地とのつながりを保っている。他方、共同体に残ったメンバーにとって彼らは経済、文化、政治など様々な面で都市と共同体を仲介する文化的ブローカーの役目を果たし、時にはニューリーダーとして共同体の運営に駆り出される。これらの意味においては、共同体を離れたインディオすなわちチョロも依然インディオであると思えることができるかも知れない。

しかしながら、チョロはその数的拡大と一極集中によって独自の利益集団として台頭する様相を見せている。また、チョロは個人レベルの経済活動において、身内や友人は例外として、ゆきずりの一般のインディオに対しては白人やメスティソがインディオに対して取るのと同じ民族差別的な態度を踏襲することが少なくない。そうした都市インディオによる共同体インディオへの民族差別的な行動は、理由は如何なるものであれ、インディオ内部における植民地主義の繰り込みを意味する。これが結果としてインディオによるチョロの民族的排除を引き起こさないとも限らない。

白人社会とインディオ社会の狭間にあって、チョロは本来的にいずれかの社会への帰属の選択を迫られる存在である。しかし、チョロが一つの利益集団として台頭しつつある今日、チョロが共同体インディオとアイデンティティを共有し続けると考えるのは余りに牧歌的な見方ではないだろうか。本発表ではさらに論を進め、チョロが一つの民族集団として振

る舞った場合の民族関係の可能性にまで言及する。

#### ○ボリビア農地改革の一側面

木村 秀雄(亜細亜大)

1953年に始まったボリビアの農地改革が、同国の農村社会を大きく変化させてきたことは疑いなく、ボリビア社会の現状を把握するために欠かすことのできないテーマである。これまでの研究によって、改革の目標のうち、搾取の廃絶が達成された結果、農村部の社会政治情勢が改革によって激変したことや、技術の普及や機械化の導入が不足したことや cooperative の運営が失敗したことなどによって、農業の近代化と生産の拡大が達成されていないことが明らかになっている。しかしながら、農地改革にまつわる一般論は数多くあっても、改革によって農地の所有状態がどのように変化し、それが農業のありかたにどのような影響を及ぼして来たかといった具体的な分析が、実際の事例に基づいて詳細に行われた例はほとんどない。

本発表は、Instituto Nacional de Reforma Agraria に保管されている農地改革原簿の分析に基づいて、アンデス山脈東斜面渓谷部に位置するラパス県ラレカハ郡における土地所有のありかたを検証しようとするものである。その内容は概略以下の通りである。

- 1) 全体が接収されるほど大きな hacienda はほとんどなく、colono を使わない小規模の私有地も多いこと。
- 2) colono たちは保有していた自留地の所有権を認められたに留まり、土地を持たない colono に新たに土地が与えられた例もほとんどないため、土地所有面積の平均化は起こっていないこと。
- 3) hacendado の土地が colono の自留地の合計を下回る例も多く、hacendado の土地も colono の自留地も hacienda 全体に広く分散しているうえ、ひとつひとつの土地区画の面積が小さいこと。
- 4) 非インディオの私有地が comunidad 内に存在する例もあるなど、hacienda-comunidad 関係は錯綜していること。

## ○カリブ海地域の観光と

### 文化にかんする諸問題

江口信清 (立命館大)

本報告では、カリブ海地域の観光の歴史をはじめ、観光の実態、観光(客)の与える現地社会・文化への影響、そしてこの地域の観光の社会・文化的特殊性について通時的、かつ共時的にかんたんに触れられ、問題点などが指摘された。

とくにそのなかでも観光客(ゲスト)と現地人(ホスト)の関係が「もてなし」という観点から考察され、この地域の観光文化的特徴が指摘された。この地域への主たる観光客はアメリカ大陸やヨーロッパ各地からの白人であり、現地人の大半はアフリカ系住民である。これらの現地人による観光客のもてなしには、かならずといてよほどアフリカの要素がステレオタイプ化して強調され、ホストが卑下するという点が含まれている。またホスト・ゲストが対等な関係になれるコミュニティの状態も実現できるような工夫も凝らされている。

この地域においては、観光客という外縁の不明確な「異人」対現地人(とくにアフリカ系住民)の関係は、対等な個人対個人の関係というよりも、むしろ歴史的に奴隷解放前のヨーロッパ系植民者対奴隷という関係が形を変えたものでしかない。奴隷制下では、植民者と奴隷の関係は、主人と自由を剥奪され、強制的にサーヴィスを要求されるという者であった。奴隷解放後の観光客とアフリカ系住民の関係は、「強制」に代わって「自由意志に基づいた」「現金」を介した関係に変身したにすぎない。「奴隷的」なステレオタイプを観光客(ゲスト)が期待し、一部の現地人(ホスト)が残りの大半の現地人と接触できない準閉鎖空間(「クラブ・メディ」のようなオール・インクルーシヴ方式の空間やホテルなど)内でこのステレオタイプを演じることによって、ホスト・ゲスト両者は不必要なエネルギー・コストの支出を避け、この地域の観光が成立してきたのだ。

## (4) 第4分科会

### ○メキシコにおけるラテンアメリカ研究の先例とCCYDELの機能

M. E. Rodrigues de Zea (UNAM)  
ラテンアメリカのある国が域内の他の国々

に関心を持ち、地域としてのアイデンティティーを模索する試みは独立以前から存在したし、独立後も新しい植民地主義が登場するなかで追求され続けたことであった。しかしながら、これらの試みはともすれば孤立した形で行われるにとどまっていた。しかしながら、第二次大戦後研究面での域内交流をめざす動きが活発化し、79年にUNAMのイニシアティブのもとに、ユネスコの勧告を受け入れて、ラテンアメリカ研究の協力と普及のためのシンポジウムが開催された。その際、次の三点が確認された。

1) ラテンアメリカ・カリブ研究のためのラテンアメリカにおける研究協力機関(SOLAR)の設立

2) SOLARとラテンアメリカ以外の地域におけるラテンアメリカ研究機関との協力をはかるためのラテンアメリカ・カリブ研究国際組織(FIEALC)の設立

3) 上記二機関の決定を調整し、実施する機関としてラテンアメリカ研究協力・普及センター(CCYDEL)の設立

そして、79年12月にはCCYDELがUNAMにおかれることが決定し、以後SOLARは二回の会議を開催した。今年の11月にはチリでの開催が予定されている。FIEALCは今年10月には第五回大会をエストレマドゥーラで、93年にはワルシャワで第六回大会を開催することになっている。

### ○ECLAC (国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会)における最近の研究動向

F. Fajnzylber (ECLAC)

### ○“Mudançaologia Mundial”

Masanori Fukushima (拓殖大)

Considerando e baseando na experiência própria do intercâmbio de ciência e tecnologia entre o Japão e o Brasil, como o primeiro representante da America Latina da Sociedade Japonesa de Promoção de Ciência (Nihon Gakujutsu Shinkō-kai) cuja localização é de São Paulo, Brasil, gostaria de dar algumas advertências concisas para nós ser humanos, observando e baseando

nas situações e mudanças que estão atualmente correndo e mudando, visual-invisivelmente, calculável-incalculavelmente tão-tão rapidamente-lógico-mais rápido do que "shinkansen".

(1) É importante reconhecer e respeitar mutuamente as culturas-artes-sensibilidades naturais-humanas, originais, ou transferidas de "outras" regiões do "mesmo mundo" que é nossa teera de ser humano, fomentadas por milhares anos no mundo de tempo natural-ambiental.

(2) De outro lado, é também importante notar e reconhecer o fato de que o desenvolvimento de ciência-tecnologia está aumentando sua velocidade de processo de produção material para o consumo de nossa vida cotidiana, especialmente nos países desenvolvidos, e nas sociedades de alta classe nos países em desenvolvimento, e o fato de que esta velocidade é, teoricamente em alguns ramos, de base na  $10^3$  vezes por ano. De fato, paralelamente com o aumento de processo desse tipo de produção, há uma tendência de transformar-se, em alguns ramos, para a "sociedade Informática" nos países desenvolvidos, bem avançados. E esta sociedade possa ter um "Vector" que tenha uma energia-força enorme, e uma direção X, com o poder político-econômico mundial.

(3) É superimportante sentir, notar e reconhecer o fato, as vezes invisível, de que há grande possibilidade do que este "Vector" tenha a força de só comer, sem digestão-cagar, ou ter em estoque no fundo de "biblioteca", ou, desde início, rejeitar, esta aconteça mais comunmente, rejeitar as culturas (incluindo artes e sensibilidades delicadas, naturais e humanas) diferentes da cultura do "Vector". O mundo deste vector, em que todas

as outras culturas sensíveis, estão mortas, ficaria de ser tão seco, tão seco mesmo, tão desgraçado e, de ser sem valor para ser humano, nossa vida futura. Ficaria de ser seco, até os povos dos países de "Vector", e também para os povos de altas classes sofocadas dos países em desenvolvimento.

## (5) 第5分科会

○再び、植民地心理について

—Martinique, Puerto Rico,

Méxicoの事例から—

角川 雅樹 (東海大)

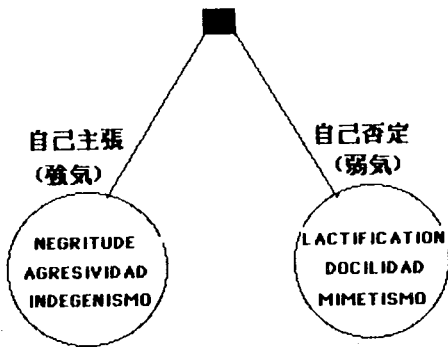
さきに演者は仏領マルチニークにおいてみられる植民地心理について論じた。マルチニークの人々には "Lactification" という「白人志向」「白人文化志向」がみられると同時に、あるいは、それと相前後して、"Négritude" という「黒人志向」「黒人文化志向」が現われることを指摘し、このような、"Lactification" と "Négritude" の間を揺れ動く心のあり方を、植民地心理として理解しようとした。

一方、アメリカの自治領プエルトリコにおいても同様の傾向がみられる。René Marqués はかつて "Puertorriqueño Dócil" (従順なプエルトリコ人) を論じたが、この議論は今なお続いている。また、Albert Rothenberg はプエルトリコ人の攻撃性について検討したが、実際、プエルトリコ人を論ずる時、攻撃性の問題を避けて通ることはできないように思われる。この "Docilidad" という一種の自己否定的傾向と、"Agresividad" といういわば自己主張的傾向は、一見矛盾するかのように見えるが、実は根は同じところにあるということができよう。

また、演者はさきにメキシコ人の心理的傾向について論じたことがある。メキシコでは Samuel Ramos が指摘した "Mimetismo" という欧米文化崇拜の傾向が窺われるとともに、"Indigenismo" という土着文化に対するこだわりもみられる。このようなメキシコ人における外来文化崇拜と自国文化志向の「葛藤」を、やはり、植民地化された人々の心理として把えることが可能である。

メキシコやカリブ海地域の人々に潜在する

このような「二面性」、言い換えれば *Ambivalence* は、15世紀末以降の新大陸植民地化という歴史的事実と密接に関係していると考えられる。



○「美」をあらわす形容詞の言語社会学的考察—メキシコ・グアダハラ市での調査結果—

岸 大介 (八千代国際大)

「美」には「内的美」と「外的美」が存在するが、いわゆる「美」をあらわす形容詞群 (*bello/bella*; *bien parecido/parecida*; *bonito/bonita*; *divino/divina*; *guapo/guapa*; *hermoso/hermosa*; *lindo/linda*; *mono/mona*; *precioso/preciosa*) のパロール・レベルの用法について、メキシコ・グアダハラ市在住の成人男女24名 (男性12名・女性12名) にインタビューした結果をまとめたところ、次のような興味深い事実が明らかになった。

(1) 大半の形容詞は「内・外」両方の「美」を表わすが、*bien parecido/bien parecida* や *guapo/guapa* のように「外的美」だけを表わすものもある。(2) *bello/bella*; *lindo/linda* など性によって意味領域が異なる形容詞が存在する。すなわち、女性に対しては「内・外」両方の「美」が適用されるが、女性から男性に対しては「内的美」のみが適用される。(3) 条件により社会的適用が困難な形容詞がある。たとえば、*bonito* と *hermoso* は女性が男性に対して用いるには、きわめて頻度が低いため、社会的限界があると考えられる。また、男性が男性に対して使用可能なのは *bien parecido* だけである。  
“*Es bien parecido*” という形で第三者に対して用いられ、社会的安全弁の役割をはた

しているといえよう。

○アンデス世界の「埋れた宝」説話

加藤 隆浩 (関西外語大)

アンデスの各地には、タパード (*tapado*) と称する「埋もれた宝」に関する民間伝承が根強く流布している。誰が、いかなる動機で、どのような財宝を隠しておいたのかという点に関してはかなりの偏差はあるものの、このタパードの発見をめぐるさまざまなゴシップが村落の中に登場する。たとえば、「Aの羽振りが急に良くなったのは、こっそりとタパードを掘り当てたからだ」とか「Bがタパードを探したが重くて掘り出せなかった」という類の話は、枚挙のいとまがないほどである。なるほど、高文明が、次々に興亡したアンデス地域であってみれば、当時の遺物＝財宝が現実に出土する可能性は大である。しかしながら、タパードを掘りだすには、タブーの遵守や一連の儀礼的行為が付きまとう。それゆえ、実際に遺物の発見があるにしても、アンデス農民にとってのタパードは、それに纏わるひとつの信仰に他ならないのである。では、このタパードという信仰がアンデス一帯に根強く存在することをいったいわれわれはどのように解釈することが可能であろうか。もちろん、タパードに関わる説話に、起源論的・伝播論的・形態論的等とさまざまな角度からアプローチすることができるが、ここでは、タパードが村落のなかで担う社会的意味を考察することになる。ところで、上述の事例からも理解できようが「埋もれた宝」に関する一連のゴシップを検討すると、それが、農民の経済、ことに財に関する観念と密接な関係があることが判明する。そこで、われわれは、それをさらに深く追求すべく、タパード譚に現れる主人公・財の発見・その結末等の要素に注目して、農民の財に対する考え方を提示するとともに、そうした財への態度に由来する行動様式をも考察する。あわせて、メキシコ・ツィンツァン社会の「宝探し」に関するフォスターの分析、パラグアイのグアラニー社会に関するプラウチェの分析等も検討することになる。



## ○「ラビナル・アチ」を巡る諸問題

ーその過去・現在・未来ー

奥村 浩一（神奈川県立大楠高校）

伝承劇「ラビナル・アチ」は、グアテマラ中央高原（山岳地帯）に位置するバハ・ヴェラパス県ラビナル村に伝わる、スペインによる植民地以前からの音楽・舞踊を伴う伝統的伝承劇である。グアテマラに於ける現存する恐らく唯一のマヤ時代（キチエ国成立後の時代、恐らく13～4世紀以降）からの伝承劇であり、同文化の伝承物語「ポボル・ブー」及び植民時代以降記述された民話集「チラム・バラム」、その他今日まで伝えられている幾らかの史話等とともに数少ないマヤ文化、特にキチエの英雄キチエ・アチとラビナルの英雄ラビナル・アチとの葛藤を通して、当時の民族意識・社会文化等々を知る上で示唆に富む大変貴重な文化遺産でもある。

この伝承劇は、初めてその全貌が明らかにされたのが1855年以降のことであり、それ以前については口承伝承ということもあって全く内容に関する記述が残されていない。毎年一回、1月17日～20日の村の守護神の祭りに、キリスト教儀式と平行して秘儀として継承されてきたが、同劇の、キチエ語ではあるがアルファベットによる記述が許された経緯について、又、従来世襲制によってこの儀式が踏襲されてきているのであるが、近年、村の近代化並びに村民の意識変容、その世襲家族内の問題、更にはグアテマラ政府のインディオ政策等の諸要因がその存亡を危うくしており、「ラビナル・アチ」の置かれている状況及び変化を、私のこの十数年来の研究結果を含め、再度同劇の持つ意味、用いられている音楽の特色、同劇の時代考案に対する新たな私案、同時にその伝承劇の将来への展望について考察を試みる。

## (6) 第6分科会

### ○ペルーの住宅事情

M. ファルコン（国連地域開発センター）

本報告では、ここ20年間にペルーの住宅状況に生じている様々な変化を明らかにし、併せて人口の急増と主要都市における人口の急激な集中に対して関係政府機関がいかなる計画を立て、政策を実施してきたかを住宅問題に焦点を併せて検討することにしたい。人口の急増やその集中はリマの首都圏のみならず

アレキパ、トルヒーヨ、チクラヨ、グラウ地区のピウラなどに見られ、これらの地域では最近の四回にわたる人口調査がその住宅事情の著しい悪化と、密集化現象さらに住宅地周辺の居住環境の劣悪化を指摘している。

### ○ペルーの社会経済構造と

#### フジモリ政権の経済政策

細野 昭雄（筑波大）

ペルーはラテンアメリカの他の主要国の場合と比べ、解決しなければならない問題、取り組まなければならない課題は少なくとも次の2つの点で異なっている。第一は、ペルーの社会経済構造が他の国と比較して複雑であり、正規の経済的組織の外にあるいわゆるインフォーマルセクターの割合が都市の住民の中の高い比率を占めていること、一方、農村では特にアンデス高原地帯において零細で貧困な農民の比率が高いことである。

第二に重要な相違は、ペルーにおいては1968年にクーデターで発足したベラスコ政権の下でのいわゆる「ペルー革命」により、ペルー独自の社会改革が広く導入され、さらに1980年代後半、ガルシア政権の下でポピュリスト的政策が進められたことから、ペルー経済が全体として通常の市場経済と乖離する特徴を著しく強めたことである。

フジモリ政権の新経済政策は、メキシコ、チリなどで推進されてきた世銀などの支援による構造調整政策と共通する点も多いが、上に述べた2つのペルー経済の特徴から生じている重要な相違がみられることを本研究では明らかにした。すなわち、フジモリ政権は、まず、第二の点で述べた多くの偏向を取り除くために多大な努力を必要とするのみならず、さらに、その後には第一の点で述べたようなペルーの社会構造における深刻な問題の解決に取り組んでゆかなければならない。

### ○ペルーの最近の政治状況

遅野 井茂雄（アジア経済研究所）

フジモリ現象は、ペルーにおける急激な社会政治変動と既存政党政治に対する国民の深い不信感の結果生じたものである。フジモリ政権は、未曾有の経済困難のなかで発足したが、経済安定化、構造調整、国際金融社会への復帰を当面の目標として、一貫した政策を毅然とした姿勢のなかで実施し、驚くべき成

果を収めてきた。少数与党政権ながら、困難な政策を実施し得たのは、そうした既存政党政治に対する国民の不信感を背景に、諸勢力・権益からフリーハンドを維持し得たためである。加えて、大統領の現実主義に基づく非政治的なスタイルは、熱狂的ではないものの堅調な支持を国民の間に獲得している。新しい政治展開が様々なところでみられる。しかし経済安定化に伴う国民の犠牲は極めて大きく、「支援グループ」による早急な金融支援の具体化が必要であるのみならず、国内的にもなんらかの政策的合意が必要となっている。また目標とされる構造改善は、ベラスコ改革以降の政府主導型経済体制に抜本的な改革を迫る大規模なものであり、人材不足を鑑みればこれを民政下で成功裡に実施するためにも、またテロ・麻薬といった国家的諸問題への取り組みとともに、中長期的には諸勢力との合意・協約が必要な段階に至っている。

#### (7) 第7分科会

##### ○ラテンアメリカの政党システム：

##### アルゼンチン、チリ、ブラジルの比較 トルクアト・ディテラ

80年代以降、民政移管が進むなかでラテンアメリカの政党の役割が高まりつつあるが、過渡期における政党の役割がラテンアメリカのなかで国別にどのように相異し、そうした相異を生み出している要因は何かをアルゼンチン、チリ、ブラジルの三国を中心に分析する。併せて東欧諸国における民主化過程における政党の役割との比較を試みたい。

##### ○T. ディテラ氏へのコメント

##### 大串 和雄（山形大）

第7分科会は、約20人の参加者を得て、アルゼンチンの政治社会学者で、シモン・ロドリゲス財団理事長のトルクアト・ディテラ氏が、チリ、ブラジル、アルゼンチンの政党制の特徴について報告した。ディテラ氏によれば、社会・経済が相対的に進んだ国では、自律的な労働組合運動に基づく社会民主主義またはより急進的な社会主義の政党が発達する傾向がある。チリはそのような発展過程を辿った。アルゼンチンはチリと同様に近代化が進んだが、企業家層や労働者の多くがアルゼンチン国籍を持っておらず、アルゼンチン人だったのはむしろ社会経済的に遅れた内陸部

から都市に流入してきた非熟練労働者であった。このため、ペロニズムという形でポピュリズムが発生した。ブラジルはチリ、アルゼンチンよりもはるかに遅れた地域を多く抱えていた。都市に流入した労働者は、グラール期にポピュリズムの支持基盤となった。しかし最近、サンパウロ地域のめざましい経済発展を背景として、労働者の自律的な運動に基盤を持つ労働者党が勢力を伸ばしている。

ディテラ報告に対するコメントは、山形大学の犬串和雄が担当した。主な内容は以下の通り。①ディテラ氏は組織化された労働運動を強調するが、インフォーマル・セクターを基盤とする運動もポピュリズムと言えるのか。（ディテラ氏から肯定的応答があった。）

②ラテンアメリカの政党制を考える上で、既存の政党や政治家の威信が低下している事実をどう評価するか。③ディテラ氏はヨーロッパの社会民主主義を参照基準とするが、ヨーロッパの社会民主主義自体が性格、社会基盤などで変化しつつあるのではないか。④ディテラ氏は、クーデターの要因として軍は文民ほど重要でないと言ったが、ラテンアメリカの軍は自律性を増しつつあり、政治的民主化の最大の阻害要因の一つとなっている。

時間の制約の中で、2人の一般参加者からさらにコメントと質問があった。

#### (8) レオポルド・セア氏講演

##### 「コロンの、アメリカ大陸と歴史の 普遍化」を聴いて

##### 谷 洋之（上智大院生）

セア氏はこの講演で、1492年以来のアメリカ大陸内外におけるさまざまな出来事を綴りながら、歴史認識上のヨーロッパ中心主義、そしてそれが支える「征服による歴史の普遍化」(universalización de la historia por la conquista)を批判し、異種族・異文化の統合というラテンの伝統をもつアメリカ、すなわちラテンアメリカから、真の意味での歴史の普遍化が始まったことの意義を強調している。

コロンのアメリカ大陸到達により歴史の普遍化・世界史化 (universalización) が始まったわけであるが、これは前者の形の普遍化であったことはいうまでもないであろう。また、人間の平等、あるいは民族自決を旗印に掲げて革命を遂行したフランスおよび米国も

それぞれスペインおよびラ米に対し前者の形の普遍化を強要した。他方、ラ米は、世界のあらゆる民族、あらゆる文化に開かれた地として、真の意味での歴史の普遍化・世界史化を実現する場となった。そしてこれはラ米が、スペイン帝国の支配を拒絶しながらも、711年以降イベリア半島を征服したモーロ人と融合したことに象徴されるような「ラテン性」(latinidad)をスペインから継承したためであるという。こうして真の歴史の普遍化は、ラテンアメリカから世界の他の地域へと拡大していったというのである。

この見方は、スペインの植民地支配と米仏両革命における開明的な思想という通俗的な理解を二重の逆説で覆し、ラ米の経験と整合性をもたせているという点で興味深いものである。しかし、この逆説はラ米国内の支配層にも適用できることではないのかという疑念は拭い切れない。これを無視すれば、米仏が用いた国内と国外での理念の使い分けと同様の論法になってしまいかねないように思われるのである。

#### (9) シンポジウム

「90年代のラテンアメリカと日本の関係を考える—国家と市民のレベルから—」  
趣旨説明と総司会 南山大学 松下 洋  
第一部 「国家のレベルから」

司会 筑波大学 細野昭雄

パネリスト

日本輸出入銀行主任研究員 岸本憲明  
外務省 参事官 田中克之  
アルゼンチン政府財務代表事務所長

V. Tedin-Uriburu

筑波大学客員研究員 N. Saavedra  
第二部 「市民のレベルから」

司会 愛知県立大学 稲村哲也  
パネリスト

聖隷福祉事業団医療福祉研究所員  
小川忠夫  
名古屋ニカラグアに医療品を送る会員  
原田篤実  
熊本アンドスの会会長 浜崎献作  
コメンテーター (一・二部共通)  
元スペイン・ボリビア大使 林屋栄吉  
上智大学 水野 一  
中央大学 国本伊代

#### ⅰ) 第1部 国家のレベルからを聴いて

田中 高(四日市大)

冒頭司会の細野氏より、近年ラテンアメリカ(以下ラ米)よりとみに日本に対する期待が高まっている。ブッシュ政権による「中南米支援構想」などでも、日本の参加・協力は不可欠なものとなっている、という発言があった。

岸本氏は日本の累積債務問題との取り組みについて、歴史的な経緯を踏まえながら説明した。82年にメキシコで債務危機が発生した当時は、短期的な問題とする見方が強く、単なる資金繰り、引き締め策で乗り切ろうとしたが、解決には至らなかった。その後ベーカー提案を経て、現在のブレイディ財務長官による債務削減を含んだより包括的な対応策へと変化してきた。ラ米の持つ大きな問題点として、外部要因の変化に弱い国内経済構造がある。競争力のある経済へと転換させるために、市場メカニズムを重視し、徴税システムの改善などを含んだ、構造調整政策が進められている。東欧やアジアの資金需要が強く、ラ米をとり巻く環境は必ずしも有利ではない。日本は各国の自助努力を優先し、効率的な資金運用によって側面的にサポートする役割を担う。保護主義の台頭が懸念される。

田中氏は外務省の対ラ米政策について、次のように述べた。4つのD(Democracy, Debt, Drug, Deforestation)とどう対処するかが基本的な見方である。民主化については、キューバを除いてほぼ達成した。債務についてはダモクレスの剣のように依然として深刻である。麻薬については米国ほどではないが、最近日本でもコカインの押収量が増えている。環境問題は総じて悪化しており、将来大きな問題となる可能性がある。従来ラ米は歴史的にも地政学上も専ら米国の関心地域であった。しかし日本は米国の同盟国であり、相互協力は不可欠である。日常的な仕事としては、政治レベルでは国連PKOへの参加。経済面では経済技術協力の推進。対米関係では中米支援構想・PDD(民主開発パートナーシップ)への参加などがある。尚対米援助はその前提として、大統領が日系人であることの前に、現在進められている諸改革が立派なものであることを、評価して進めている。田中氏は締め括りに、ラ米側(政治家・官僚)は日本を、米国・ヨーロッパと同じよ

うな関心を持って見ていないのではないか、という問題提起をした。

この提起については、その後会場から反論も出された。しかしすぐに結論の出るテーマではない。私達研究者もじっくりと考えてみる必要がありそうである。

ウリプル氏は概略次のように述べた。ラ米は現在従来の天然資源と農業に依存した輸出体制から脱皮し、新しい経済体制を構築しようとして努力している。アルゼンチンはインフレも鎮静化し、一連の自由化策も功を奏している。日本政府の対応に比べると民間企業はフレキシブルで、ラ米では投資を期待している。このためにも日本国内の税制度の改善をお願いしたい。

サアベドラ氏はスライドを使いながら、日本の対ラ米投資自体が減少しているのに加えて、投資先がバハマ、パナマなどに集中し、歪んだ形になっていると発言した。

国本氏はメキシコ市における米・英・独・仏・伊各大使館の文化センターを比較調査した経験から、外務省の広報文化活動が大きく立ち遅れていると指摘した。

筆者の聞き終った感想として、やや内容が盛り沢山で、消化不良の感が残るものの、これまでになかった企画で、今後の学会の一つのあり方を示したと思う。国家（あるいは政府）と市民は、日本では明治維新以来どうしても対立的に見られやすい。学会が今後、両者の話し合う機会を折に触れて作ることによって、その乖離を縮めることに貢献できればと思う。

## ii) 第二部 “市民のレベルから”を聴いて 辻 豊治(京都外大)

第一部が日本の対ラテンアメリカ関係における国家からの視点という主旨の発言であり、ラテンアメリカの最大の課題である債務問題と日本の援助に議論が集中した。この第二部では市民レベルでの対ラテンアメリカへの関係を探る運動からの発言が予定された。

司会の稲村氏から東海地方におけるさまざまなラテンアメリカ関係の市民団体が紹介された後、以下の3つの報告がなされた。ラテンアメリカに関連していずれももっとも緊急で話題性のある対象をテーマとする市民運動である。

第一報告「燃える熊本からの報告—ペルー

支援活動—」 浜崎 献作氏

熊本から多くのペルー移民を輩出しているという背景から結成された「熊本アンデスの会」を主宰する立場から、報告者はスライドを使ってそのさまざまな活動を紹介した。とくに熊本出身のフジモリ氏が大統領に就任してから県全体での支援活動が盛り上がり、「フジモリペルー支援の会」が結成され、「アンデスの会」がその中心となってペルーの子供たちのための学校づくりを支援しているとのことである。また県産米、衣料、医療器械の援助や日系人慰霊塔の設立などの広範な活動状況が伝えられた。ペルー支援については熊本出身の女性歌手による募金活動やデニス君にたいする義援金活動などよく知られているが、地元熊本でのペルー支援の状況がわかり、心強いかぎりである。

第二報告「希望の国ニカラグアと私達の活動」

原田 篤実氏

原田氏の「ニカラグアに医療品を送る会」は、85年に設立されたもので、米国の経済封鎖による医療品不足に対する援助を目的としているが、美術展、エルネスト・カルデナル講演会、演奏会など広くニカラグアの文化を紹介して、一方的な支援活動ではなく、ニカラグアの積極面を学んでいこうとする姿勢で活動を行っている。このような相互交流は支援運動であっても市民レベルでの運動を進めていくうえで重要な点であろう。

第三報告「在留ラテンアメリカ日系人問題—浜松から見た視点—」

小川 忠夫氏

報告者は浜松を伝道場にして牧師さんであるが、「浜松外国人労働者と生きる会」を結成して、人権問題や労働問題の解決に努めているとのことである。このような運動のなかで労働災害や給与の未払いなどの問題をつうじてブラジル、ペルーなどの日系人労働者との出会いを紹介した。

コメンテーターの発言では、以上のような市民レベルの活動が、政府の対応が遅れていて、手の届かない所でのその役割の重要性やこうした運動をつうじて日本人がラテンアメリカを知るよい機会となっているなどの指摘がなされた。

会場からは、日本政府のODAについてNGOの地味な活動には援助しないという発言やニカラグアのサンディニスタ政権に対しても農地改革や識字運動などは援助の対象とし

て評価すべきではないかという趣旨の発言が印象に残った。

フジモリ大統領の出現や日系人子弟の出稼ぎ労働により一挙に身近な存在となったラテンアメリカに対しては今後いっそう政府の対応が問われ、市民レベルでの活動も活発化してこよう。この意味で今回のシンポジウムの開催は時宜に適っている。研究レベルでの今後の対応が研究者に課された宿題である。

### 3. 学術・文化情報

#### 1) 中国ラテンアメリカ学会理事・方幼封女史来日

上海復旦大学ラテンアメリカ研究室主任であり、かつ中国ラテンアメリカ学会理事を勤められる方幼封女史が、東京大学教養学部の客員研究員として、4月7日から5月8日まで日本に滞在された。4月19日には東京大学において、中国におけるラテンアメリカ研究と日本におけるラテンアメリカ研究について、情報交換の場が設けられ、日本側からは細野理事長と大貫、恒川両理事が出席した。方幼封教授によれば、中国におけるラテンアメリカ研究の歴史と現状は以下の通りである。

中国におけるラテンアメリカ研究・教育は、1960年代はじめ、北京大学、中国人民大學、北京師範大学、復旦大学においてラテンアメリカ史の授業が設けられることで始まった。ほぼ同時期、中国社会科学院の哲学社会科学研究所内にラテンアメリカ研究所が設置された。1964年になると復旦大学にラテンアメリカ研究室（日本で言う学科）、南海大学（天津）にラテンアメリカ史研究室が設けられた。1966年にはじまる文化大革命以後10年間は研究が中断したが、70年代後半には北京と上海で研究が再開され、今日では北京大学、復旦大学、上海外国語学院、湖北大学、山東大学にラテンアメリカ研究室が設けられ、教育活動以外にラテンアメリカ関係の外国書の翻訳や国別単行書の出版の活動をおこなっている。

大学以外の研究機関としては、外務省の国際問題研究所や国家安全省の現代国際問題研究所、中共中央対外連絡部・文化部・対外経済貿易研究所、新華社のラテンアメリカ室などがある。

1979年には、スペイン・ポルトガル・ラテンアメリカ文学研究会とラテンアメリカ史研究会が組織され、後者は1984年になって中国

ラテンアメリカ学会へと発展した。学会メンバー数は約1千名であるが、そのうち大学で教職についているのは百数十名で、あとは公営企業を含む政府系機関の職員と大学院生である。会員の研究分野としては経済、政治、外交がそれぞれ3分の1ずつで、対象とする地域としては、メキシコ、ブラジル、アルゼンティン、チリの順が多い。

文学の分野では前述した研究会に会員が百名ほどいる。また歴史学は別にラテンアメリカ史研究会が存続している。

中国ラテンアメリカ学会は、年1回研究大会を開く一方、4年に一度総会を開きそこで理事選挙が行われる。現在学会の理事長は元駐ブラジル大使の張徳群氏である。学会誌の発行は不定期におこなわれる。

中国での研究者養成の方法としては、ラテンアメリカ研究で博士号を授与する大学が中国ではまだないので、修士号をとった学生を、アメリカ合衆国のテキサス大学オースティン校、コロンビア大学、南カリフォルニア大学などに送ることによって行っている。

この会合の後の懇談の場では、両国の学会の交流の可能性が話し合われ、当面学会誌等出版物の交換をおこなうこと、および「アジア・ラテンアメリカ関係」などのテーマで共同研究の可能性を探ることで合意を見た。

方幼封女史は、4月22日にアジア経済研究所、上智大学イベロアメリカ研究所を相次いで訪問され、上智大学では、中国におけるラテンアメリカ研究の現状について補足的なお話をなさる一方、中国とラテンアメリカの政治経済関係についても言及された。後者について、その主な内容は以下の通りである。

中国は80年代なかばに、平和友好・相互支持・平等互利・合同発展を対ラテンアメリカ関係の「16字方針」として定め、政治体制とイデオロギーの違いを越えた友好関係の強化を追求している。特に経済力と政治的影響力をもつブラジル、アルゼンティン、メキシコ、ベネズエラ、ペルーなどとの関係が深いのが、近年はキューバとの関係も改善された。貿易関係が一番深いのはメキシコで、紡績品、絹、工作機械らを輸出したり、港湾建設の合弁事業に従事したりする一方、メキシコからは石油を輸入している。昨年度の対ラテンアメリカ貿易総額は30億ドルだが、お互いに外貨が不足しているのでパートナー取引の多いのが現

状である。最後にブッシュ政権の米州自由貿易圏構想について、方幼封女史が、中南米個々の国の決定を尊重するが、中国としてはラテンアメリカ一体化の方向を一層支持すると述べられたのが印象的であった。

(文責 恒川恵市)

ii) V Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe (FIEALC = ラテンアメリカ研究機関の世界組織: Coordinador General Leopoldo Zea)

日時: 10月6~10日

場所: スペイン (Cáceres, Extremadura)

テーマ: Más allá de los 500 años: Un enfoque del futuro del América Latina y el Caribe en su aspectos políticos-internacionales económico-sociales, y culturales-humanos-religiosos, etc.

日本における会員は上智大学イペロアメリカ研究所と南山大学ラテンアメリカ研究センターである。問い合わせは、上記センターへ。

iii) 上智大学イペロアメリカ研究所主宰の「ラテンアメリカにおける日本のイメージ」シンポジウム、ボゴタ市で開催予定

トヨタ(財)助成研究「ラテンアメリカにおける対日イメージに関する調査」が終了した。報告書『ラテンアメリカ主要国における対日イメージ調査(その2) - 7カ国9都市の最終報告書』(ラテンアメリカ・モノグラフ・シリーズ、No.5、128頁、送料共2000円)がすでに出版されているが、来る8月にコロンビアのボゴタ市で次のようなシンポジウムを開催する予定である。

日時: 91年8月29、30日

場所: ボゴタ市

参加者: 日本側 (G. アンドラーデ・水野一・西平重喜)

LA側 (Tijuana, San José, Caracas, Bogota, Lima, Brasilia, San Paulo, Buenos Aires の調査実施協力者)

iv) 『南欧文化』15号の出版

文流書店が1970年代から年1回発行を続けてきた『南欧文化』が今年で15号となった。

主として南欧研究の論文が掲載されるが、91年1月に出版された15号は「ラテンアメリカの独立革命」をテーマにして、西日本の研究者の論文を特集している。同雑誌は個人企業(書店)の営利を目的とせず、若手の研究者に研究発表の場を提供したいとする考えから発行されている。非売品で宣伝されていないため、研究者の間でもその存在を知らないものがあると思われるが、研究の成果を発表する場を求める、特に若い研究者に活用してもらいたいと文流書店は希望している。また共同研究や今回のような統一テーマにより特集号を組むことも、歓迎している。なお、文流は本学会の賛助会員でもある。

(文責 国本伊代)

#### 4. 近着会員業績

[抜] 吾郷健二「経済危機とメキシコ農業」(『西南学院大学経済学論集』第25巻第4号、1991年3月)

[抜] 真鍋周三「マテオ・ガルシア・プマカウマの軌跡 - トップ・アマールの反乱からペルーの独立へ」(『南欧文化』第15号、1991年1月)

[抜] 住田育法「18世紀ポルトガルの対英従属構造とブラジルの独立運動」(同上)

[抜] 辻 豊治「ペルー独立に関する再考」(同上)

[抜] 大垣貴志郎「メキシコ・シティ - 1812年 - もう一つの独立戦争 -」(同上)

[抜] 神代 修「キューバ独立戦争と奴隷解放」(同上)

[抜] 青木芳夫「ハイチ革命ノート」(同上)

[抜] 同上「ペルー・クスコの子供たち - 児童画交流と『国際化』 -」(『奈良大学紀要』第19号、1991年3月)

[抜] 同上「ラテンアメリカ人口史 - 征服期(つづき) -」(ラテンアメリカ資料センター、『資料ラテンアメリカ』第15号、1991年3月)

[抜] 初谷譲次「ディアス期メキシコにおける地方オリガルキーについて - ユカタン州モリーナ家のエネケン産業支配 -」(『天理大学学报』第166輯、1991年2月)

[冊] 宮西照夫、大井邦明、池田年穂『国際シンポジウム「古代マヤ文明と幻覚剤」報告書』(和歌山大学、1991年3月)

[抜] 片倉充造「『予告された殺人の記録』

## 訃

会員今西正雄氏（同志社大学名誉教授・西洋経済史）が昨年6月13日ブラジルで逝去されました。享年85歳。昭和3年同志社大学法学部経済学科卒業後ドイツなどに留学、昭和24年より同志社大学経済学部教授。ドイツ経済史を専攻されましたが、昭和40年ころから「低開発」問

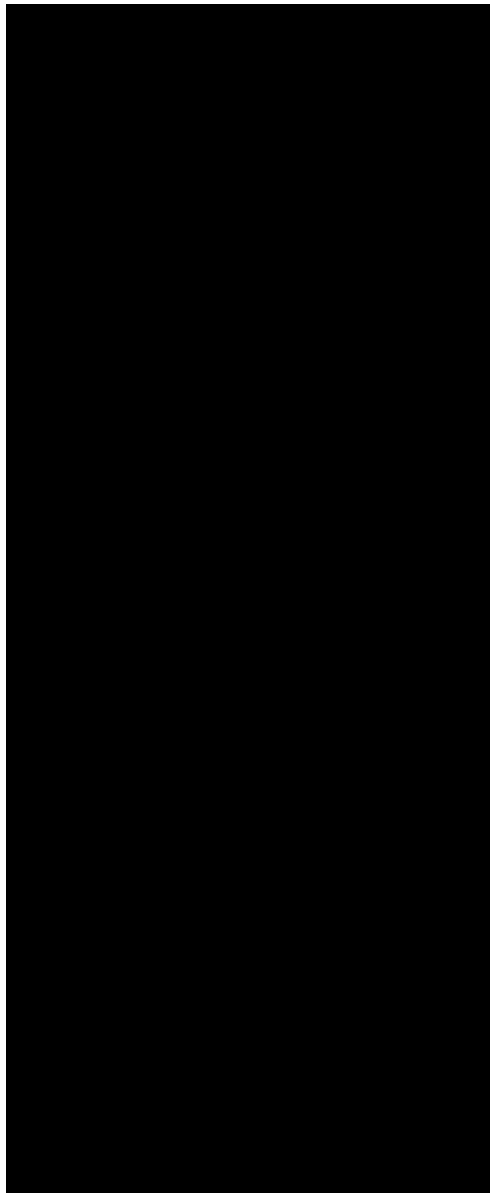
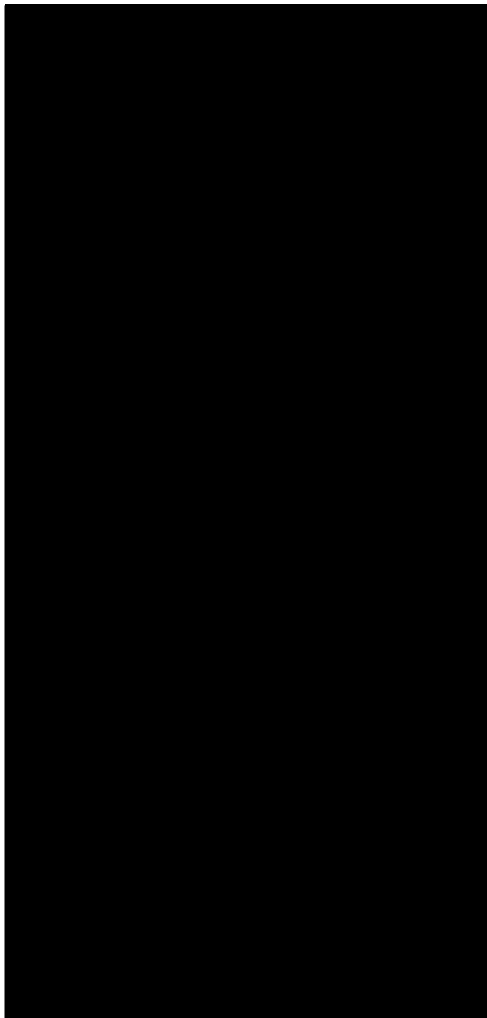
## 報

題に関心をもち、ブラジル経済史、特にポプリスト的指導者ヴェルガスの計画経済の研究にとりくまれました。昭和51年の退職後は、同志社大学大学院や他大学で後進の指導にあたられました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

「原作小説と映画作品の間で」(『外国語教育』第17号、1991年3月)

### 5. 事務局から

#### 1) 新入会員 (第51回理事会承認)



## 『年報』 12号論文等の募集

『年報』12号(1992年6月刊行予定)に掲載するための論文等を下記の要領で募ります。投稿を希望される方は、論文・研究ノート・書評の別、題目、分野、用語(日本語・英語・西語・ポ語等)、予定枚数、氏名を、10月12日(土)までに書面にて学会事務局までお知らせください。

原稿の締切は1991年12月末日とし、審査の結果を御通知いたします。審査を通過したもので、審査委員の見解を伝えて修正・見直しをお願いすることがありますので御承知ください。

なお原稿は未発表のものにかぎります。

○主題：学問分野を問わずラテンアメリカとその周辺地域に関連するもの。特に会報36号でお知らせしたように、12号ではコロンブス500年にちなむ論文を複数掲載したいと考えていますので、このテーマに関する力作を期待します。

○用紙：和文 1行20字詰横書原稿用紙(200字・400字、市販原稿用紙可。ワープロ使用の場合は、1行20字もしくは40字とし、総字数が簡単にわかるようにしてください。)

欧文 市販タイプ用紙

○枚数：和文 論文 60枚以内(400字詰原稿用紙)

研究ノート 30枚以内  
書評 5~20枚  
欧文 論文 10,000語以内  
研究ノート 5,000語以内  
書評 800~3,500語

(注) 語(words)とは、タイプライターのマージン幅タッチ数に行数を乗じ、これを定数6で割った値を指します。原稿は上下左右のマージンをゆったり取り、必ずダブル・スペースで打って、審査委員がコメントを書きこみやすいようにしてください。

ダブル・スペースは、機械の行送り「3」にあわせてください。

「2」ではハーフ・スペースになりますから御注意ください。

○和文の場合、300語以内の欧文要約を添付してください。打ちかたは上と同じです。

○完成原稿には氏名を記入せずにお送りください。

図版：図版トレースは、執筆者に作成いただくか、そうでなければ実費を申し受けます。初稿段階ではスケッチで構いません。写真の場合も、スライド紙焼き代等は執筆者負担で願います。

審査委員 原稿1本につき1名ないし数名。氏名は公表しません。

上でご案内しています。発表された論文等の業績を是非お送り下さい。

IV) 会費納入のお願い。

前年度までの会費が未納になっている会員がおられます。今年度分も含めて会費の納入を是非お願いします。

III) 業績送付のお願い。

事務局に送付いただいた業績は、当会報誌

### 編集後記

学会設立以来はじめての3日間というもり沢山の年次大会が終り、その成果特集の編集を終えた。割付け作業をしながら、ワープロの普及がいかに編集作業を軽減したか実感した。でも熟年研究者は新たな技術習得に悪戦苦闘しているのかもしれない。(国本伊代)

No.38 1991年7月20日発行

〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学社会学系細野昭雄研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎0298-53-5067